

ますます繁盛を願って

井上理津子



「戦後六十年企画」を、やさもさとやってきたのがついこの間のような気がするのに、今年には戦後七十九年、来年は戦後八十年である。足掛け二十年の間に、いったい何人の人が死んでいったのだろう。よほどの著名人でもない限り、人ひとりが死ぬと、その人の記憶、思い、考えといったものが全て消える。近親者らへの伝達は幾分あっても、そこまで止まりだと思ふ。そのため、市井の人たちが戦前・戦中・戦後をどんな思いでどう暮らしたかといったことを耳にすることが、とんとなくなつた。

なぜそんなことを書いたのかというと、このたび「絶滅危惧個人商店」の文庫化にあたって、ライター・編集者の北條一浩さんが解説を書いてくださった。その中に、(本書では)店の話を聞く流れの中で、多くは戦争の話になるとの旨があるのを読み、改めてそのことに気付かされたからだ。

同書を書いたのは、「ここにあったあの店が、いつの間にか消えている。チェーン店に変わっている」という光景に出くわすたび、さみしいなあ、と思つたのがきっかけだった。あるとき、自宅最寄りの文房具店へ「これと同じものをください」と

百円そこそこのボールペンを持つていくと、「ダメダメ。もつたない」と替え芯を勧められ、いたく感動した。その店主のように気高い商いをなさっている店がいろいろな業種にあるだろうと血が騒ぎ、結果、個人商店十九店を取材に回った。その店のありよう、ヒストリー、位置する街やお客さんとの関係も垣間見たいと店主たちにあれこれお訊きしたのだが、ご年配店主たちは戦時中のことを、昨日のことのようにお話しくださった。

日暮里(荒川区)の佃煮「中野屋」の女将さん(取材時九五歳)は、「女学校を昭和十三年に卒業して……微用されたらヤだから……文部省大臣官房秘書課に勤めたの……玉音放送は、秘書室で一人ぼつんと聞きましたよ」という話に続いて、戦中戦後の店の脇話が出てきた。店の隣に駐在所があり、お巡りさんに「味噌くれ、醤油くれ」と頼まれる。商売柄、店には味噌も醤油もあったので、あげる。すると、お巡りさんはなぜかお酒をたくさん持っていて、くれた。そんなふうな仲だったから、「戦後はお砂糖があるのに闇売りができなかったわ」と。

山谷(台東区)の「金星堂洋品店」店主(同八十一歳)は、東京大空襲の日、小学二年生だった。「店の中に火の粉が入つて来たのを覚えています」。隣の煙草屋一家と一緒に家族で逃げた。あつちが燃えている、こつちが危ないと流言飛語が飛び交う中、サーベル(洋刀)を持った巡査に「風上に逃げろ」と言われ、北向きに走って助かった。「大人たちが『関東大震災よりひどい』って言っていた」とも。

雑司ヶ谷霊園(豊島区)の中の花屋「花處住吉」の主人(同八十六歳)も戦時中は小学生で長野に学童疎開したが、一九四五年四月十三日の城北大空襲の日、たまたま東京に戻っていた。「深夜、B29がどんでん飛んでくるじゃない。パンパンパンンって音がするじゃない。池袋が火の海じゃない。怖かったわよー。おっかなかったわよー」と話した。玄關脇に、お客さんも入れるよう畳三畳敷きの大きな防空壕を作っていたそうだ。

大田区の青果店「レ・アル かきぬま」の店主(同七十八歳)は、一九四五年に四歳だったが、B29の記憶が鮮明だった。

「焼夷弾が地面に落ちて、跳ねて、火の粉が飛ぶ」。父は戦死。店は一九四五年四月十五日の城南大空襲で全焼した。練炭工場へ勤労奉仕に行っていた母が、毎日練炭をもらって持ち帰っていたため、空襲で燃えた自宅の「お米の焦げた匂いと、練炭が真っ赤に燃えている様」が頭にこびりついていると口角を下げた。この方は、戦後、並々ならぬ苦勞をして店を再建する母を支えた。

と、書き出したらキリがない。「絶滅危惧個人商店」は、実は戦争というものが実際どうなのか、店主の言葉で伝える記録の側面も持っている、と大げさで気恥ずかしいが思う。このたびの文庫化がうれしい。ご苦勞の時代を経てこられた店が、今後ますます繁盛することを願っている。

ちくま文庫
絶滅危惧個人商店

井上理津子 著
定価924円(10%税込)

大澤真幸 資本主義をめぐる著者の探究の、最高到達点！ 資本主義の〈その先〉へ

終焉が予感されつつも(その先)が見えない資本主義。精神的、社会的現象として再定義し、資本主義概念を刷新。(その先)へ行くための原理を示した決定的論考！



ちく
3刷

定価2640円(10%税込) ※電子書籍も配信中

筑摩書房
営業部 ☎03-5687-2680
https://www.chikumashobo.co.jp/